

(社)東洋音楽学会関西支部

支部だより 第2号 (1989-01-13)

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

定例研究会について

例会担当理事 山口修

(1) 案内

関西支部 第142回定例研究会

とき 1989年2月4日(土) 14:00~16:50 ところ 大阪府立文化情報センター(地図参照)
担当 由比邦子(会場)、山田智恵子(会場) 多目的ホール 電話 06-444-1011
瀬山徹(司会)、志村哲(企画調整)

14:00-15:00 [連続講座] 《楽譜の諸相》 その2 月溪恒子

音楽用語としての動詞とその記譜 - 尺八の場合

15:20-16:50 [研究発表] 片岡義道

仁和寺本阿彌陀經の復元演奏について

18:00 [懇親会]

場所 曾根崎たよし 大阪市北区曾根崎2丁目9-13 電話 06-312-9388

交通 別掲地図参照

会費 5,000円程度

内容 牛しゃぶしゃぶの宴会コース

申し込み 1月31日までに、はがきまたは電話にて関西支部(相愛大学)尾野まで

※ 完全予約制のため、申込締切厳守、変更の申し出は必ず前日までにお願いします。

(2) 今後の定例研究会 開催予定 および 発表の公募

第143回 1989-04-22 [予定] 京都市立芸術大学(西京区) 発表申込締切 1989-03-31

第144回 1989-06-03 大阪芸術大学(南河内郡) 発表申込締切 1989-03-31

第145回 1989-09-29 [予定] 島根大学(島根) 発表申込締切 1989-07-15

第146回 1989-11-22 [候補] 大阪大学(豊中) 発表申込締切 1989-07-15

上記の公募は、新しいテーマによる連続講座(次頁参照)でもフリーのテーマでも結構です。ただし、申込多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともあります。予めご了承ください。

◆申込方法 連続講座・フリーの区別、発表の種別(研究発表、調査報告、資料紹介、研究演奏等の別)、発表題目、使用希望機器、希望日、氏名、連絡先をはがきに明記のうえ、下記宛て送付ください。

◆送り先 〒560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部音楽学研究室 山口修

支部だよりについて

総務担当理事 月溪恒子

『支部だより』第2号をお届けします。例会案内、連載エッセイを軸として今後も続けていきます。ご意見、投稿(とくに連載エッセイ)を山口理事(阪大)宛お寄せください。

今後の発刊予定は次の通りです。

第3号 4月10日(4月・6月例会案内) 原稿締切 3月31日

第4号 9月5日(9月・11月例会案内) 原稿締切 7月15日

(2) 三味線の「手」

大塚拜子

「この手のエッセイを書くのは好きなのですが、手がかかる用事をかかえている時に、手を抜かずに仕上げるのは難しく、私の手に負えないかもしれません。」というように、「手」にはいろいろな意味があります。

三味線でも「手」という言葉はよく用いられます。「手が上がる」（上手になる）、「手が回る」（速い部分を正確に弾くことができる）の他、「手を覚える」、「この手は難しい」、「手が同じである（違っている）」、「本手」と「替手」、「合の手」など「手」を使った表現がたくさんあります。「手を覚える」以下の「手」は、ほぼ旋律（一曲全体または部分）あるいは旋律型の意味で、三味線以外にも尺八や箏などで使われています。三味線の場合、この「手」という言葉は、まさに演奏者の手の動きをあらわしているのではないのでしょうか。右手は主として「間（ま）」に、左手は主として音程と音色にかかわります。そしてこの手の動きを追っていくと、旋律という言葉から連想される音程関係やリズムの他に、音色の問題（同じ音程でも糸と指が異なると音色が違う）が、しだいに明らかになってきます。すなわち、五線譜に採譜された旋律（部分的に和音も含む）ばかりでは見落とされがちなのが、「手」という言葉にこだわってみると、見えるようになってくるのです。

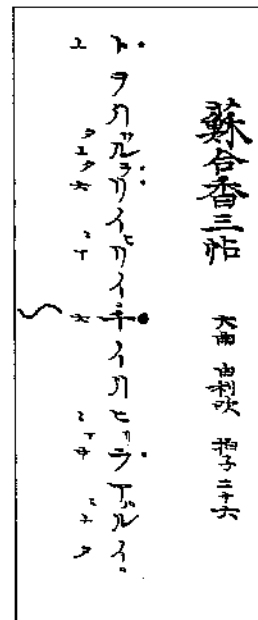
旋律とか旋律型といった言葉が、三味線音楽にぴったりあてはまれば良いのですが（現在、義太夫節の研究では、旋律型という言葉が定着しているようです）、そうでない場合（たとえば長唄の三味線に、旋律型という言葉はほとんど使えないと私は思っています）、むやみに旋律や旋律型という言葉で片付けようとしないうちが良いのではないのでしょうか。「手」が意味することのあまりの多様さに、つい使用をためらいそうになってしまいますが、伝統的に用いられてきた「手」という言葉が、三味線音楽を一層深く理解するための手がかりとなるなら、このような言葉を研究の場でも、もっと積極的に使ってよいのではないかと思います。

(3) 帖（じょう）

南谷美保

「帖」という雅楽用語は、『邦楽百科辞典』によれば、

「楽曲や舞の構成部分を数えたり、構成上生ずる繰返しを数える語」と定義されている。舞楽でいえば、『教訓抄』に、万歳楽には「有₂三帖」終帖打₂三度拍子₁と記されるように、舞に応じて奏



される楽の繰り返される単位をいう。また、大曲では、序、破などのひとつの楽章が、いくつかの「帖」により構成されている場合がある。その各「帖」は、ほぼ同じ譜の反復の一回分をさすこともあるし、また、それぞれが、異なる譜により構成される場合もある。

一般には、「帖」という用語は、折本や屏風をさしていたり、またこれらを数えるのに用いる単位として、あるいは、紙や海苔について、その一定の枚数を束ねたものを数える単位として用いられる。この「帖」という字の語義は、『大漢和辞典』によれば、「上書き、法帖、帳簿、貼紙、手形、手紙、定める、従う、安らか」などとなり、そこには、雅楽用語として用いられる際の意味を見出せない。

『歌舞品目』巻之五上には、「帖」について、「楽ノ遍数ノ名、漢土ニ疊ノ字ヲ用フ。又鶴トモイフ」とある。そこで、「疊」という字を『大漢和辞典』によってみれば、20ほどの語義が挙げられるなかに「歌をくりかへすこと、鼓をうつ」というものがある。これにより、「帖」が「疊」から転じたとする『歌舞品目』の説には首肯けるものがある。

美術の分野でも、奈良時代の『国家珍宝帳』に「御屏風老佰疊」という項目があり、以下その細目を挙げるなかにも、「疊」が屏風のワンセットを示す単位、つまり後世の「帖」と同義に用いられている例をみることができる。

(4) イロモ (irama)

高岡結貴

音楽を記譜する必要を感じていなかったインドネシアの人々も、事のよしあしは別として、オランダ植民地時代から数字譜をガムランに適用し始めた。それを見ると、一行目に曲名と一緒にさまざまな音楽的な情報が文字で記されている。なかには、演奏法を規定する内容が短い単語一つで表わされる例もある。イロモもその一つである。

イロモは一般的に「速さ」を表わす言葉であるといわれている。イロモの表わす速さには5種類あり、それぞれに名称がついている。最も速いイロモは1拍が1秒から2秒くらいの速さであり、最も遅いイロモはその16倍の速さになる。しかし、これだけしか表現しないのであれば、西洋のようなメトロノーム記号を用いても構わないかもしれない。そうしないのは、その速さが非常に大きな幅を持っているからなのであろう。しかしそれだけではない。単に速さを表わすだけならラヤ(laya)といえは充分である。ところが、ガムランでは速さに応じて、音量や音質がある程度決まっている。遅いほど音量は小さく、音質は柔らかくなる。イロモはそれらすべての要素を総合した言葉であるのだ。ジャワの人々はあるイロモの「響き」というものを身体で覚えている。あるイロモの名称を思い浮かべると、それにふさわしい演奏法が選び出される。だから、イロモという言葉は「速さ」というよりは「状態」を表わす言葉であるといってもよいだろう。

Lancarkan Manyaraewu, irama tanggung, slendro manyura

Balungan gending:

・ 5・3 ・ 5・3 ・ 5・3 ・ 6・(5)

(5) コロン (koron) とソリ (sori)

廣井榮子

西アジア独特の音の響きのなかに、全音と半音の組合せからは得られない深みのある音がまじって聞こえる。それは微分音と呼ばれる。微小音程と言い替えたとしても、西洋的な枠組みからの表現にすぎない。イランのペルシャ古典音楽の場合、半音よりやや狭い(4分の1音ほど低い)ことをコロンと呼び、逆に高いことをソリと呼んでいる。もっとも、この二つの用語は、音楽を楽譜に記す習慣が定着する過程と平行して、専門用語として明確に意識されるようになったようである。

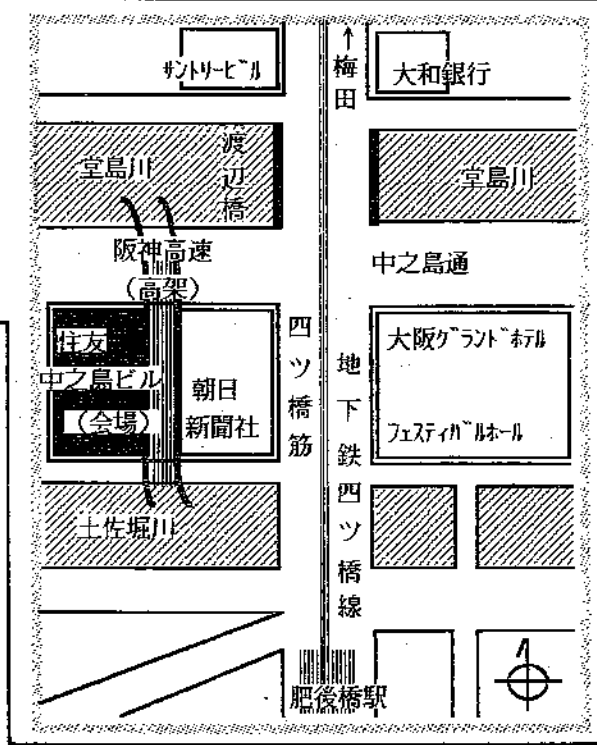
骨組みにのっとったかたちでの即興演奏を旨とするペルシャ音楽は、近年まで楽譜に書き留める必要は誰も感じなかったらしい。ところが、ヨーロッパから五線譜が導入されると、それをペルシャ風に応用する工夫がなされた。調記号にしる、変化記号にしる、フラットやシャープの使い方をヨーロッパ的な意味をあまり損なうことなくペルシャ音楽にあてはめることが、まずできる。そして、微分音に対しては、フラットとシャープをそれぞれ変形した記号を考案しているのである。

このように、わずかに記号を変形するだけで西洋の記譜法を無理なく応用できるのは、日本に比べるとイランが、地理的にも歴史的にもヨーロッパと近い関係にあることに起因しているように思われる。



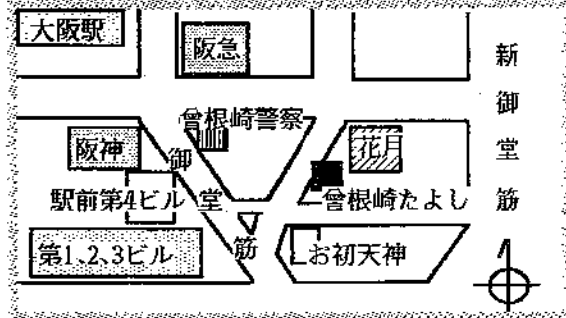
第142回定例研究会 会場案内
大阪府立文化情報
センターへの交通

- ★所在地 大阪市北区中之島3-2-18
住友中之島ビル5階
- ★地下鉄四ツ橋線 肥後橋駅北西へすぐ
- ★地下鉄・京阪 淀屋橋駅西へ徒歩10分



懇親会 会場案内
會根崎たよし
への交通

- ★所在地 大阪市北区會根崎2-9-13
- ★電話 06-312-9388
- ★地下鉄谷町線 東梅田駅より徒歩
- ★JR線 大阪駅より徒歩10分
- ★地下鉄御堂筋線 梅田駅より徒歩
- ★阪急・阪神線 梅田駅より徒歩
- ☆注意! 「たよし」は「會根崎たよし」以外に「阪急東通りたよし」、「お初天神たよし」があるので間違わないようお願い致します。
- ☆参加申し込みもお忘れなく。



支部関係の問い合わせ先

総務関係	月溪恒子・幸野智子	火・水・金
〒585	大阪府南河内郡河内町東山 大阪芸術大学音楽学研究室	☎0721-93-3781内線539
機関誌関係	藤井知昭	水・木
〒565	吹田市千里万博公園10-1 国立民族学博物館	☎06-876-2151
例会・支部だより関係	山口修	月・木・金
〒560	豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部音楽学研究室	☎06-844-1151内線3251

入会等のお問い合わせ

(社) 東洋音楽学会関西支部
〒559 大阪市住之江区南港中4-4-1 相愛大学音楽学台同研究室内 ☎06-612-5900 内線331